実録：アンケート結果から視える検査前プロセスが与える影響に対する対応の現状と課題

◎立川 将也 [1)]
岐阜大学 医学部附属病院 [1)]

【はじめに】
検査結果に影響を及ぼす過誤要因を最小限に抑えるために、検査前プロセスである検体採取は正しく実施される必要がある。そのためには検体の採取量や採取容器はもちろん、凝固や溶血の有無など、その検体がそれぞれの検査に適しているかを確認することが不可欠である。特に血清検体の溶血による正誤差や、輸液混入による異常値はパニック値にも関わる重要な因子である。本セッションでは血清検体溶血時や輸液の混入が疑われた場合の岐阜県下医療機関での対応について報告させていただく。
【事例と対応調査】
岐阜県下医療機関 10 施設に輸液混入疑い時、血清検体溶血時の対応についてアンケート調査を行った。血清検体溶血時の対応についても同様の質問を行い、さらに段階希釈した模擬溶血サンプルの写真から対応の対象となる検体の選択を求めた。また、輸液混入疑い時は、採り直しを依頼しているか、測定値は報告しているか、何を基準に判断しているかについて回答を求めた。
【結語】
血清検体の溶血についてもその表現方法に明確な基準は存在せず、各医療機関で対応が異なる。また、輸液混入疑いについては明らかな希釈がない限り、検査後プロセスにおいて主観的に判断するほかないのが現状である。今後、溶血などの血清情報の表現方法と対応の標準化と輸液混入疑いを検出する仕組みの構築が望まれる。本シンポジウムを通して、これら標準化と構築について考えてみたい。

岐阜大学医学部附属病院　生化学免疫検査室　080-6923-7251